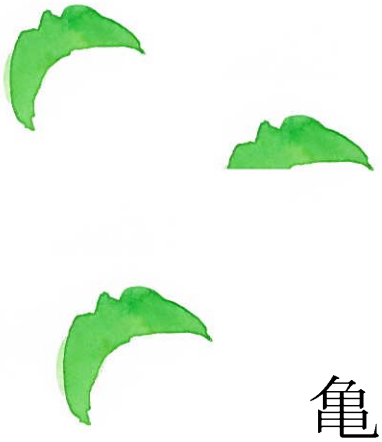
俳句集

令和二年度　第十六回

亀山市民俳句会

（小・中学生の部　入選作品）

主催　亀山市・亀山俳句会



選者

宮田正和先生

石井いさお先生

上田佳久子先生

予選

亀山俳句会

亀山西小学校5年生

秀逸　きれいだなせんこう花火落ちないで

秀逸　海行って貝がらの中海の音

秀逸　夏がくる雨はそろそろやむのかな

秀逸　海にいる青い魚はすずしそう

栗もらう何を作るのお母さん

なみの音潮の香りがしてきたよ

秋の風くうきがいいなきもちよい

こおろぎがきれいな声でないている

コスモスが庭にさいたよゆれている

亀山南小5年生

特選　あざやかなボールのような日がしずむ

秀逸　ひらひらとしばふにおちる紅葉かな

秀逸　稲の穂が時々はねるいなごかな

虫の声夕日がしずみはだ寒い

ゆかたきてげたの音がカランコロ

亀山南小6年生

帰り道黄金に光る麦畑

ミンミンと今日はどこからせみの声

川崎小学校6年生

秀逸　秋の夜長そで半そでまよう日々

秀逸　かわむくと梨と林ごが分からない

夏祭りたこ焼きにだけ大行列

くりひろいだれが一番とれるかな

お月見だもちにはしぶい茶が似合う

手でひろってちくちくいたいくりひろい

赤とんぼ密になりすぎ危ないよ

とびはねるプールの水滴淡い色

蟻のれつたどるとそこは自分の家

風鈴のやさしい音がなりひびく

夏休みカメラまわしてすぎていく

水遊び水かけあって楽しいな

野登小学校4年生

むしのこえまどから入るすずしい風

雨つぶにうたれてキラキラあじさいの花

野登小学校5年生

特選　秋の日に照らされのびる人のかげ

特選　夜の川月がうつってぼやけてる

雨上がり一輪光るひがん花

ひがん花風にふかれてゆれている

亀山中学校3年生

特選　近づくと落ちてるセミが動きだす
特選　虹見えて勢い強くこぐペダル
特選　アスファルト揺れる陽炎麦茶色
秀逸　長い列やっと入れた甲子園
秀逸　簾からこぼれる日差し心地良く
秀逸　ひまわりはいつも前向き元気者
秀逸　秋の夜小窓を開けて耳すます
秀逸　耳まわりとぶ蚊の音に目をさます
秀逸　花火音遠くに聞こえ勉強だ
秀逸　浴衣着て帯が留まらず祖母を呼ぶ
　　帰り道ゆうぐれ時のセミの声
　　そうめんがつるつる運ぶすずしさを
　　セミのこえ暑さとこえでイラつくよ
　　夏の夜に君の背中と白いシャツ
　　百合の花きれいにうつる水たまり
　　風鈴の音や心に風ふかす
　　秋の風季節の終わり告げる風
　　やる気さえとろけてしまうこの暑さ
　　いつまでも見ていてくれるひまわりが
　　夕暮れにほのかに色づく鳳仙花
　　ひがん花みんなの目線うれしいな
　　お月見で探してみるのは月うさぎ
　　どんぐりがかわいくころがる急な坂
　　ふと見れば向日葵ばわーもらえたな
　　せみの声今年もあつくなりそうだ
　　炎天下半紙に染みるすみと汗
　　風鈴をゆらすその風心地よい
　　梅雨すぎて虫も花も目を覚ます
　　部活中見上げる空にいわし雲
　　砂浜で貝を見つけて投げてみた
　　紫陽花の光るしずくがおちにけり
　　夏休み睡眠だけで終わりそう
　　風吹いて麦わら帽子旅に出る
　　ごほうびは赤くて甘いトマトかな
　　うるさいなそれでも愛しいせみの声
　　白球をがむしゃらに追う熱い夏
　　「もう朝か。」網戸で叫ぶ油蟬
　　昼寝する子の子守唄蟬の声
　　花火より屋台のグルメ食べ尽くし
　　雷が静かな家で鳴りひびく

中部中学校3年生

特選　金木犀ふっと香って消えてゆく
秀逸　水たまりのぞいてみれば青い空
秀逸　月明り照らされている田んぼ道

秀逸　日が沈み空っぽの海夏終わる

秀逸　満月がおおきな池にうつりけり

秀逸　おにやんま蛍光灯にひっかかる

秀逸　ゆっくりと成長してゆく入道雲

しいたけをしょう油で焼くとおいしいよ

落ち葉落ちいよいよ冬が始まるな

おばあちゃんおいしいメロンありがとう

浴衣着て夕方五時に待ち合わせ

おなか鳴り日の入りの空カボチャ色

愛犬とじしゅくしてたら夏がきた

友達と自転車こいで遊ぶ夏

夏休み行くはずだった遊園地

梅雨の時期湿気で広がる母の髪

ままみてと朝顔咲いた夏の朝

関中学校　3年生

特選　ひまわりが潮風を背に立っている

秀逸　きれいだな月がてらした夏の海

秀逸　青空に白く伸びゆく入道雲

ハチがいる真夏の家の中にいる

青田風こころの内も駆けぬける

告白を打ち上げ花火かき消した

母の日にこっそり買ったテディーベア

炭酸が抜けたサイダー君のせい

五月雨や傘持ち歩く並木道

奏でよう友と最後の文化祭

カラフルな打上花火空照らす